

私の作曲活動と作品

辛 島 光 義

The Activity of Composing and My Compositions

Mitsuyoshi KARASHIMA

【要 旨】

県立高校の統廃合で、2009年4月「県立中津東高校」と2010年4月に「県立爽風館高校」がそれぞれ新たに開校誕生しました。

新設校開校に伴い、中津東高校からは、新校歌の監修作業を依頼され、爽風館高校からは新校歌の作曲を依頼され、それぞれ作曲しました。

また、2010年10月開催の第12回「県民芸術文化祭」の開幕行事「長唄・三味線演奏会」における特別バージョン「三味線と洋楽とのコラボレーション」の作曲を主催者の「大分県長唄連盟」から依頼され、作曲しました。

以下に詳細を報告します。

I 大分県立中津東高等学校 校歌の監修作業

(1) 新設高校の概要と沿革

中津東高校は、それまでの県立中津工業高校と中津商業高校との合併によって新たに誕生した高校である。これら2つの高校の歴史を紐解けば、大正5年、中津町立中津商業学校が設立され、昭和6年県立中津商業学校に改称。因みにこの時の校歌は、土屋文明作詞 山田耕筰作曲のものであった。昭和19年、県立中津工業学校が設置された。昭和21年、中津市立商業学校が設置された。昭和23年、この二つの学校が統合され、県立中津第二高校が設立。昭和26年、県立中津東高校に改称。この時の校歌の作曲は、宇佐出身の作曲家 清瀬保二であった。

昭和38年工業科が独立し、県立中津工業高校が設置された。校歌は武蔵野音楽大学作曲という個人名を残さないものであった。

昭和40年、残された商業科が県立中津商業高校と改称した。校歌は以前の中津東高校時代の応援歌を一部改編して誕生した。

元々中津東高校という工業科と商業科を併せ持つ学校が存在していたが、生徒数の増加でそれぞれが独立した経緯があり、今回生徒数の減少でまた元に戻った形だ。2009年4月の開校を目指し準備を進めている状況であった。

学校が誕生する度に新たな校歌が生まれ、廃校の度に校歌が幻と化すわけであるが、その当時の校歌がそれぞれ大切に保管されている事が望ましい。

(2) 校歌の監修と作曲の違い

2008年9月、新設校準備室長の立石義孝先生と準備委員の後藤修一先生の訪問を受けた。

内容は、校歌の作曲では無く「監修」との事。監修というのは「粗方出来上がっている校歌を文学的に、音楽的に研究し、完成させる」ことである。

勿論、私にとっては初めての経験で、設立準備室のある県立中津工業高校を訪ね、校歌制定委員会に出席した。

委員の構成メンバーは、設立準備室関係の方々の他に地元中津の中学校の先生やギター演奏を趣味とするお寺の住職さんなどがおられた。

提示された資料には、素案の曲の出来上がった経過などがあり、歌詞は広く中津市民をはじめ地元の中学校や高校の生徒を対象として公募を行い、1～3番までの歌詞としてまとめた作品が15点、短いフレーズの応募数は107点に及んでおり、中津市民の新設校に寄せる関心の高さを示していた。

監修は一部の手直しで完成を見ると思われるが、校歌の歌詞が文学的に完成しているか、そしてその歌詞の持つ「起承転結」が音楽的に一致しているかという複雑な内容を実は含んでおり、監修作業は作曲作業よりも遥かに難しいものである。

歌詞さえ完成していれば、作曲は自由に構想を練ることが出来るし、個人的判断で作業を進めることが出来る。校歌を制定する場合は、普通この形を取り、歌詞の完成を見て作曲を依頼する。

しかし今回の「監修」依頼は、未完成の素案としての歌詞と旋律であり、その素案の中身を生かしつつ完成させよとの依頼である。つまり歌詞も旋律も両方の修正や取捨選択を必要とするものであった。

これらの応募作品を参考にして校歌制定委員会が纏めた歌詞が次のとおりである。

(3) 素案の歌詞

- ① 大地踏みしめ 八面山
 仰ぐ我らの 意気高く
 一途に夜明け 待ちわびて

集うは若き 光たち
 ああ中津東 自尊の心胸に秘め
 ああ中津東 夢歩みだす
 ② 広く豊かな 周防灘
 いのち生み出す その力
 受けて我らも たくましく
 磨くは 吾と吾の業
 ああ中津東 希望の扉今たたき
 ああ中津東 未来を拓く
 ③ 山国川の 川面ゆく
 風に吹かれて しなやかに
 仲間と絆 深めつつ
 真心持って 学び合おう
 ああ中津東 自由の翼空を行く
 ああ中津東 さあ翔ばたこう

(4) 制定委員会の歌詞に対する説明と内容

① 1番は中津の山、2番は中津の海、3番は中津の川（風）をイメージしておりそれぞれに「緑」「蒼」「透明」をイメージカラーとして組み込んでいる。

② 1番で「夢を求める道」があることを示唆し、2番でその道を未来へ向けて歩き始め、3番で夢の達成と自立に向かう思いを込めている。

(5) 歌詞の改定作業

・歌詞改定の骨子

① 基本的に自然の姿とそこに生きる高校生の望ましい生き方を表現した素晴らしい出来栄であるので、原詞を出来るだけ生かす方向で検討した。

② 全体として、1～3番の自然を取り入れた部分で、山、海、川となっているが、水の流れの法則からして、山、川、海と順番を入れ替え、だんだん広く、大きく発展するイメージに置き換えた。

③ 歌詞中の形容詞や形容動詞などの活用形と取り扱いに訂正を加えた。

④ 校歌を歌うのは現役の高校生だから、高校生の目線での歌詞に訂正した。

例＝集うは若き光たち…高校生は自分たちを若き光たちと認識しない。

また、光たちは大人目線で高校生をみて

いるので、友と我に変更。

「吾」の文字は「我」に変更した。

- ⑤歌詞中の「一途に」「わびて」「生み出す」「風に吹かれて」「しなやかに」等あまり校歌に使われない言葉の一部である。特に「わびて」は詫びての意味で、寂しく心細い様の意味となり校歌には不向きとした。
- ⑥「ああ中津東」が2回使われているが、1回だと効果があるが2回だと、くどい感じが否めない。しかも「ああ」の言葉はいささか古臭い感じがする。しかし、原詞を生かして1回採用した。

(6) 監修後の歌詞

- | | |
|---------------|---------|
| ① 大地踏みしめ | 八面山 |
| 仰ぐ我らの | 意気高し |
| 希望の夜明け | 澄みわたり |
| 煌めく光 | 友と我 |
| 自尊の心 | 今胸に |
| ああ中津東 | 夢歩み出す |
| ② 流れ清らか | 山国川 |
| 広野潤し | 東風吹かす |
| 友愛絆 | こだまして |
| まごころ結ぶ | 友と我 |
| 真理の扉 | 今尋ね |
| ああ中津東 | 未来を拓く |
| ③ 陽光(ひかり) 映える | 周防灘 |
| いのち育む | 恵みあり |
| たゆまぬ努め | 称えつつ |
| 英知を競う | 友と我 |
| 自由の翼 | 今広げ |
| ああ中津東 | さあ翔ばたこう |

(7) 監修の説明と内容

- ①1番は中津を代表する山、2番は中津を代表する川、3番は中津を取り囲む海を表し、それぞれ「緑」「蒼」「碧」をイメージカラーとした。
- ②1番で「希望の高校生」、2番で「未来を拓く高校生」、3番で「学びと飛翔の高校生」をイメージした。
- ③山 川 海への水の自然な流れ、広がりて高校そのものや、学ぶ高校生の限りない飛

躍、発展をイメージした。

(8) 校歌楽譜の監修の骨子

素案の楽譜を歌詞との関係で精査して次のような感想を得た。

- ①全体的に歌詞の持つニュアンスやアクセントにはあまり重点を置かず気に入ったメロディを重ね、歌詞以前にメロディありきの感じである。
- ②曲にはやはり「起承転結」が必要で、全体的に散漫で未完成の感じ。
- ③前半の4段目までは音域の変化が乏しく部分的盛り上がり欠ける。
- ④4小節目の付点二分音符一つで「ざん」と2音節の発音は疑問。
- ⑤全体的に明るい感じの曲に出来ているのでこれは採用した。

(9) 監修作業後の感想

- ①創作作業は基本的に自由な発想から出発すべきで、監修という作業は素案が既に示されており、それを十分に加味して作業しなければならないと言うことは、想像以上の自由な発想の拘束を余儀なくされる。
- ②素案を生かし、尚且つ完成品として監修することは、お互いの妥協と譲れない主張が生じ、禍根を残す場合がある事を予測しておく必要がある。
- ③今回の作業において、歌詞にも旋律にも素案を考えられた方々には、大変申し訳ないことで、主張を取上げて取り下げて頂いた部分がありました。監修者の主張については、一々説明を申し上げて納得して頂く方法しかありませんでしたが、監修者の私にしてみれば、素案を考えた方々の心情やご労苦を十分に反映させての作業で、むしろ監修者の方が、妥協の連続で歩み寄ったと思っている。
- ④不思議なもので、歌の歌詞やメロディは、創作の過程や仕上げの段階で毎日毎日口ずさんでいると、いつの間にかその曲が完成しているような錯覚をし、すっかり気に入ってしまう傾向にある事である。作曲者は、常に研究心を怠らないようにす

機関としての独立高校の歴史を刻んで来た。

「碩信高校」の歴史は、昭和23年に県立大分中学校に通信教育部が設置されて始まった。昭和29年大分上野丘高校に移管され、学校教育法の改正を経て通信制教育が確立。昭和43年「碩信高校」として独立した。

他方、「大分中央高校」は、昭和16年大分中学校内に「大分夜間中学」として発足。普通科高校の軒下を借りての紆余曲折の歴史を経て、昭和37年「大分中央高校」として独立した。この2校が発展的に統合して新たに新設校として設立されたのが「県立爽風館高校」である。

通信制や定時制の教育手法はそのまま受け継がれ、新たに単位制を取り入れての生徒の自学自習を尊重・推進し、時代のニーズに応える新設校が誕生した。

(2) 提示された歌詞案

「夢」

- ① 風 爽やかに大空を舞い
若葉そよぐ虹の杜
悠かな想い 時代を超えて
真実の愛と絆を知る館
今咲き誇る 煌めくいのち
夢を語ろう 明日を信じて
- ② 風 清らかに緑をめぐり
若葉憩う 自主の杜
一途な希望 時代を超えて
真実の愛と勇気に出会う旅
今羽たこう輝くいのち
夢を拓こう 未来に向かって

(3) 歌詞の素案改訂の骨子

- ①基本的に原詩を尊重し、その多くを採用した。
- ②「そよぐ」や「憩う」は綺麗な言葉であるが歌詞の文句としては弱いと判断した。
- ③「時代」を「とき」と読ませる部分は洒落ていて良いが、悠久の想いには「春秋」を「とき」と読ませた。
- ④爽やかな風と「館」で校名となるが、露骨なので「館」をカットし、その館の環境を広く取り入れて「杜」と置き換えた。
- ⑤「明日」を「あす」や「あした」と読むの

は具体的過ぎるので、「未来」を「あした」と読ませた。

- ⑥「自主」は1番の「虹」と対句に扱うのは無理があり、「学び」と替えた。

(4) 改定後の歌詞

「未来（あした）へ」

- ① 風 爽やかに大空を舞い
若葉 鮮やかに 虹の杜
悠かな想い 春秋（とき）を超えて
真実の愛と絆
今咲き誇る 煌めく生命
夢を語ろう 未来を信じて
- ② 風 清らかに緑を巡り
若草健やかに 学びの杜
遥かな望み 時代を超えて
真実の愛と勇気
今羽ばたきに 輝く瞳
夢を拓こう 未来に向かって

(5) 作曲の骨子

- ①何調で作曲するかについては、歌詞の持つ全体的雰囲気や高校生の声域を参考に決めるが、将来、高校生が自分たちで校歌を楽しむために考慮してハ長調で作曲した。
- ②メロディの作曲の基本は、その言葉のアクセントやイントネーションなどに対してあくまでも自然体で臨むべきであると考え、歌詞が生かせるよう取り扱った。
- ③曲としての起承転結を十分に考慮し、「真実の愛と勇気」の部分前半の山場として、「未来（あした）を信じて」を曲全体の山場として構成した。
- ④起承転結の「起」の部分は、歌詞の「風爽やかに大空を舞い」を緩やかに穏やかに定め、「承」の部分は、文字通り「起」の部分の垂流でまとめた。
「転」の部分はメロディには現れていないが、伴奏に転調を用いて変化を付け、「結」の部分は、歌詞の「今、咲き誇る煌めくいのち」の高校生ひとり一人が「夢を語ろう 未来（あした）を信じて」という山場へと盛り上がるように結んだ。
- ⑤全体的に歌詞とマッチさせることが出来て

作曲者として充分満足している。
 歌の作品はこうあるべきだと確信した作品
 に出来上がった。

(6) 作曲した校歌楽譜…資料2

Ⅲ 「三味線と洋楽とのコラボレーション」
 ～遙かな春秋(とき)へ～ 作曲

(1) 平成22年度大分県民芸術文化祭開幕行事
 「大分県民芸術文化祭」は、1965年の「第1

回大分県芸術祭」の開催を母体として県民文化
 の向上の歴史を経て1998年「第13回国民文化祭」
 大分開催を機に「県民芸術文化祭」として再出
 発し、今年で12回目を迎えた。

開催期間を毎年10月～11月までの2か月間と
 し、開幕と閉幕にはそれぞれの団体が受け持ち
 華麗な舞台を繰り広げて華を添えてきた。

今年度の開幕行事は、大分県長唄連盟が主催
 し、「永遠の名旋律 長唄・三味線演奏会」と
 銘打ち、伝統的三味線音楽の神髄を披露する。

資料2

大分県立爽風館高校校歌

校歌制定委員会 作曲 辛島光義

$\text{♩} = 102$

Vocals



か ぜ さ わ や か に お お ぞ ら を ま
 か ぜ き よ ら か に お も どり を め ぐ
 り わ か ば あ ざ や か に に じ の も
 り わ く さ す こ や か に ま な び の も
 り は る か な お も い と き を こ え て し ん
 り は る か な の ぞ み と き を こ え て し ん
 じ つ の あ い と き ず な き い ま さ き ほ こ る き ら
 じ つ の あ い と ゆ う き い ま は ば た き に かが
 め く い の ち ゆ め を 一 か た ろ う あ し
 や く ひ と み ゆ め を 一 ひ ら こ う あ し
 た を し ん か じ て た に む か じ つ て

(2) 「三味線と洋楽とのコラボレーション～
遙かな春秋（とき）へ～」

長唄連盟の要請で、新たな試みとしての三味線と洋楽との共演の創作依頼を受けた。私自身、このような作品の創作の経験が無く、三味線の演奏形態をはじめ、三味線音楽の長所、短所までを総合的に把握することから始めた。

三味線をはじめ邦楽器を演奏する方々の特徴としては、音曲を全て暗譜して演奏出来ることである。洋楽の世界では、リサイタルなどの場合を除いて多くの場合楽譜を見ながらの演奏である。原因の一つとして、その伝承法の違いにある。

邦楽界では、師匠による口承法が伝統的に受け継がれ今日に至っている。つまり音曲を手習う場合の手法が口承で、師匠の模倣に終始し、暗譜を前提として成り立っている。三味線音楽も例外ではない。

洋楽は、楽譜に示された作品の「再現」を基本とし、楽譜の通りに演奏する事や楽譜に現れない作曲者の「意図」や「心情」などのメッセージまでも想像し、表現に生かす点にある。

邦楽では、「師匠」が楽譜であり、洋楽では、「楽譜」が師匠である。

この点の違いが「コラボ作品」の作曲の根幹となった。

コラボの演奏曲として、三味線の名曲「連獅子」と「越後獅子」の2曲を核にして「洋楽」との共演が作曲依頼の主眼であった。

※作曲の基本構想としての理念

- ①副題の～遙かな春秋（とき）へ～は、長い三味線の歴史を辿り悠久の世界への想いと将来への発展を願う意味を込めた旋律の発見、創造とする。
- ②核となる2曲は原曲を尊重し、この2曲までの前奏部分と2曲の繋ぎ、さらに2曲の洋楽との絡みと山場となる終曲への流れを作曲の基本とする。
- ③邦楽（三味線音楽）と洋楽とは、果たして融合の世界が考えられるのか、単なる同舞台での羅列で、相容れない世界なのかの模索の中で共演を目指す。

④演奏時間を15分程度とし、小節数では360小節程度とする。

⑤演奏規模としては、会場の広さに適合する三味線を7本とし、この音量に適合する洋楽規模として、弦楽四重奏一組、木管楽器（フルート、クラリネット、オーボエ、アルトサクソフォン、ファゴット）各1本とティンパニー、ピブラフォン、ゴングの打楽器群とピアノ一台で構成した。

(3) 三味線と洋楽とのコラボレーション

資料3

※資料3は361小節、74ページに及ぶためその一部25ページを添付した。

IV おわりに

音楽の分野での創作活動は2通りある。その一つは、音楽を楽譜にする作曲そのもの。もう一つはその楽譜を忠実に再現する音源化の活動である。

歴史に名を残す作曲家や、彼らの作品に新たな息吹を吹き込み再現する演奏家は世界中の愛好家に癒しや夢を提供して来た。

音楽愛好家はその作曲家や演奏家を支える大きな役割を果たしてきた。

この関係は将来的にも続くであろう。

今回私の拙い作曲活動の報告をさせて頂いたが、音楽愛好家の一人として創作活動を続けたいと願っています。

資料3

三味線と洋楽とのコラヴォ (遥かな春秋へ)

163

Fl. I.

Ob.

B♭ Cl.

A. Sax.

Bsn.

Timp.

Gong

Vib.

Pno.

Vln. I

Vln. II

Vla.

Vc.

sua